

# ハンガリーの「音楽小学校」の音楽教育

——日本・オーストリア・ドイツの音楽教育と比較して——

志 澤 彰

## はじめに

2000年4月より翌年3月まで、私は本学より学外派遣研究員としてオーストリア・ザルツブルクに派遣され、研究生活を送った。研究の一環として、オーストリアを中心にドイツ・ハンガリーなど周辺国の音楽教育の現場を視察した。中でもハンガリーの「ニレジハーザ」<sup>(1)</sup>にある「コダーイ音楽小学校」<sup>(2)</sup>には特別の関心を持って訪問し、優れた音楽教育の実状を把握できた。

そこで、この論文では、「コダーイ音楽小学校」の音楽教育を中心に、オーストリアやドイツの学校における音楽教育と課外における音楽教育、そして日本の音楽教育のあり方などそれぞれの特徴・違いなどを比較・考察し、視察したハンガリーのいくつかの「音楽小学校」の中からニレジハーザの「コダーイ音楽小学校」をケース・スタディとして焦点を当て、音楽教育のあり方を考察する事とした。

ニレジハーザの「コダーイ音楽小学校」には、同校の児童で組織されている「カンテムス」<sup>(3)</sup>という児童合唱団と、そのOGで組織されている「プロムジカ」<sup>(4)</sup>という少女合唱団がある。両合唱団とも日本へ何回も演奏旅行に来ており、「世界で最高の児童合唱団」<sup>(5)</sup>とも言われ、その実力の高さはよく知られている。どのような教育の下で育ち、前述のような成果を上げている合唱団に成長したのか、その教育の過程を調査する事を目的として視察した。2000年8月、「コダーイ音楽小学校」を訪ね、「カンテムス」児童合唱団と、「プロムジカ」少女合唱団を指揮し、練習を重ね、1曲だけであるが演奏会でも指揮する機会を得た。両合唱団の実力の高さはよく知っているつもりであった。しかし、実際にこの合唱団と共に音楽作りをし、改めて団員達の音楽的感性の素晴らしさに驚嘆した。

この合唱団の子供たちは、「音楽小学校」で毎日合唱指導を受けている子供達である。合唱することに非常に慣れている上、そのレパートリーは数百曲とも言われている。数多くの曲の練習を聞いたが、ほとんどの曲を全員が暗譜で歌っていた。そして、指揮の通りに忠実に歌う事がよく訓練されていた。例えば、指揮者が間違えて振ると（正しくも歌えるのであろうが）その通りに間違えて歌う。憎らしいまでに指揮に的確に歌う事が出来る合唱団である。指揮者が「こう歌って欲しい」という表現を指揮棒一本で示すだけで、それに的確に答える事が出来るすばらしい合唱団である。棒の動き一つの微妙な違いを全て歌い分けてしまう

一〇〇

合唱団、それは指揮者に微妙な違いをも区別して振る事を要求している合唱団でもある。

この合唱団を指揮する私の練習でも、団員はかなりの集中力を持っていた。演奏会の本番では、歌いだしのアインザッツを待つ団員達の集中力と緊張感が高まり、棒が動き出す瞬間を待つ団員数十人の「気」が私の体中に突き刺さり「怖さ」のようなものすら感じた。

常に練習を共にしている指揮者の下で、その指揮の通りに「うまく歌える合唱団」はいくつもあるかもしれない。しかし、誰の指揮にもすぐに「その指揮の通りに歌える合唱団」は他にあるだろうか。なぜこの合唱団はこれほどの的確に指揮に答えられる豊かな音楽性や歌唱能力を持っているのだろうか。どのような子供たちが、どのような教育を受け、前述のようなすばらしい合唱団になったのか、その教育のシステムや内容を知りたいと思い、半年後に再度、ニレジハーザを訪ねた。

この論文では派遣研究期間の視察体験をまとめ、日本・オーストリア・ドイツ・ハンガリーの音楽教育のシステムや内容の違いを比較・考察する。まず、日本の音楽教育の現状について記し、次にオーストリア・ドイツの音楽教育について、最後にハンガリーの「音楽小学校」の教育と、その中でも最も優れた音楽教育の事例としてニレジハーザの「コダーイ音楽小学校」の音楽教育の特徴について記す。おわりにそれぞれの国の音楽教育のシステムや内容を比較し、判明した点をまとめる。

## 1 日本の音楽教育の現状

文部省の「小学校学習指導要領」には、音楽を理解し学ぶ為に基礎的かつ重要な「階名唱」に関し、以下のように書かれている。小学校1・2年では「階名で摸唱したり暗唱したりする事」、3年では「ハ長調の旋律を（階名で）視唱する事」、そして学年が上がるにつれ、イ短調・ヘ長調・ニ短調の旋律をそれぞれ「移動ド唱法」<sup>(6)</sup>で歌えるようにする事を原則としている。器楽に関しては、1年では「ハーモニカや打楽器」に親しみ、簡単なリズムや旋律を演奏すること、となっている。2年で「オルガン」を、3年で「リコーダー（縦笛）」を、そして4年ではそれらの楽器で「音色に気を付けて」、5・6年では「音色の特徴を生かして」演奏することを求めている。

これらが、そのまま実践されているならば、日本の平均的な音楽水準は世界中どこの国にも負けない高度なものになっているはずである。しかし、現実はなかなか難しい点も多い。階名唱に関しては、ハ長調だけでもなかなか覚えられない児童が多数いるのに、同じ五線上の音を、「調」により読み方を変えなければならない「移動ド唱法」など、とても手が回らないのが教育現場の実状である。さらに、リコーダーなどの楽器を演奏する時は、「固定ド唱法」だけで間に合うという考えの指導者もいて、「移動ド唱法」による階名唱を実施している学校はご

くわずかである。

リコーダー奏等楽器演奏では、階名が分からないと理解できず、演奏もなかなか難しそうであるが、子供は聴奏法だけでもかなり演奏できてしまうのが実状である。これらの音楽科の授業は、小学校では週2時間位行われている。そして、義務教育9年間の音楽授業では、歌や楽器演奏に必要な多くの音楽理論などもカリキュラムに入っている。しかし、これら子供たちが実際に覚え、身に付いているかどうかはかなり疑問である。

これらの内容を教える教員は、ピアノ等の鍵盤楽器がある程度弾ける必要がある。教員採用試験に音楽の実技試験がある都道府県では、「バイエル教則本」の終わりの方(100番前後)あるいは文部省指定の「歌唱共通教材」を「弾き歌い」する事が課せられている。ただ、この採用試験の曲1曲だけが弾けた程度では、実際の指導にはまったく不十分なことは言うまでもない。

そして、学校教育以外でも、本当に音楽を深く習いたい子供、あるいは習わせたいと思う親は、個人や企業が開いている「音楽教室」へかなり「高額な月謝<sup>(7)</sup>」を払い通っている。しかし、日本では、「音楽教室」を開くのに特に資格が必要<sup>(7)</sup>なわけではなく、専門教育を受けていない者が指導者となっている場合もある。

日本の義務教育における音楽教育の内容はヨーロッパの国々に比べてもかなり高度な内容と言える。但し、それがどこまで身につけているかはかなり問題である。

## 2 オーストリア・ドイツの音楽教育

オーストリアとドイツは隣国であり、政治的に一つの国になっていた時代もあり、言語も同じドイツ語圏である。そのため、教育システムや音楽教育の内容も同じような部分が多いので、この章でまとめて記す。

日本の小学校にあたる義務教育の学校をオーストリアでは「フォルクスシューレ<sup>(8)</sup> (Volksschule)」という。その先生は、ギター・ピアノ・リコーダーの内のどれかを演奏出来なければならない。ザルツブルク郊外にある「ベルクハイムフォルクスシューレ (Bergheim Volksschule)」の4年生の授業では、先生がギターを弾いて子供たちがそれに合わせて「斉唱」で歌うだけであった。「フォルクスシューレ」では、「階名唱」はほとんどされていないが、先生により5年生から「ドイツ音名 (C・D・E〜)」を教える事もある。「リコーダー奏」等の楽器演奏は、希望者が「ムジーク・シューレ (詳しくは後述)」で習うものであり、「フォルクスシューレ」では扱わない。そのような授業が週に1時間あるだけである。オーストリアやドイツでは、小学校4年終了時(10歳)に、将来、職業訓練校を希望するか、高等教育を受ける学校を希望するか、進路を決めなければならない。そのような進路の一つに「音楽ギムナジウム (Musischen Gymnasium)」という、10歳から18歳までの生徒が音楽を中心に学ぶ「中・高等学校」がある。しかしここを修了しても皆が音楽大学へ進むわけではない。

オーストリアもドイツも、多くの音楽家を輩出し、音楽が豊かな国と思われているが、「フォルクスシューレ」における音楽教育は、高度な内容であるとか音楽的に優れているとは、決して言えない。

「フォルクスシューレ」における音楽教育は前述のようであるが、オーストリアやドイツには各地に「ムジーク・シューレ (Musik Schule)」が設置されている。これは1歳半位の幼児から20歳位までの希望者が、放課後（おおむね午後2時頃より）に音楽を習いに行く、「公立の音楽教室」である。この「ムジーク・シューレ」の運営に必要な経費は、（自治体によって多少違いがあるが、）市や町が半分負担し、州が4割を、生徒は1割くらいの負担で成り立っている。生徒はわずかな負担で、国で認められた資格を持つ専門家の指導が受けられるのである。

一流のオーケストラの楽員が「ムジーク・シューレ」の指導者を兼ねていることも多い。知り合いの「ムジーク・シューレ」の指導者は『週の半分位を教えるだけで、贅沢を言わなければ、生活していけるだけの給料がもらえる。』と、言っていた。行政からの援助のお陰で、生徒の月謝はわずかだが、指導者は十分な収入が得られるのである。それだけ音楽家が大事にされ、厚遇されている国なのである。

「ムジーク・シューレ」で習う事ができる科目は非常に多い。ピアノはもちろん、ヴァイオリンからコントラバスまで全ての弦楽器、フルート・オーボエなどの木管楽器、トランペット・ホルンなどの金管楽器、マリンバや各種の打楽器など、オーケストラで使われるほとんど全ての楽器を習う事ができ、ギターやリトミック・合唱のクラスもある。日本の教室では珍しい、リコーダー、ハープ、アコーディオンなどや、ツィターなどの民族楽器のクラスもある。それらの楽器の個人レッスンのほかに、ジュニア・オーケストラ、リコーダー・オーケストラ、アコーディオン・アンサンブルなどのクラスもある。

日本のような個人経営のピアノ教室もあるが、そのような個人教室の先生は、ごく一部の高名な先生であり、その月謝は「ムジーク・シューレ」の十倍とか、それ以上かかる。

ミュンヘル郊外のヴォルフラーツハウゼン<sup>(9)</sup>という町の「ムジーク・シューレ」(Städtischen Musikschule Wolfratshausen)の教室は、全て防音設備を備えた、りっぱな「音楽教室」であった。14室のレッスン室と、アンサンブルや、小さな発表会もできるホールがあった。そして、前述のような科目がほとんど全て揃い、48のクラスでレッスンが行われていた。この町は、人口わずか16,000人位の小さな町である。周辺の村を含め人口にして25,000人位の地域から、600人以上の子供たちが通っていた。合唱のクラスは、年齢により分けられた3クラスと初心者の為の基礎コースを備え、どのクラスでも、発声や美しいハーモニーを作る為の、基礎的な練習に時間をかけていた。

北ドイツ・ハッレには「ズィングシューレ (Singschule)」と言う「音楽教室」がある。Singschuleは直訳すれば「歌の学校」である。この地方では「歌

＝合唱」というように、特に合唱の盛んな町であった。この「ズィングシューレ」でも、1歳半の幼児からレッスンを受けていた。地下1階・地上2階建ての学校ほどもある大きな建物には、個人レッスン室から合唱練習用の広いレッスン室まで、大小いくつものレッスン室があった。1歳半からの幼児のレッスン室は、保育園のようで、小さい子が喜びそうなものが飾ってあり、簡単な打楽器なども用意され、お母さんと一緒にリズム遊びなどをする。各レッスン室には年齢に合わせて、ピアノ以外の楽器類もいろいろ用意されていた。楽譜庫には大量の楽譜、衣裳部屋には民族衣装やミュージカル用の衣装など、数百着もの衣装が用意されていた。合宿用に調理室も用意されているなど、立派な施設であった。

この「ズィングシューレ」のレッスン内容の特徴は、「歌の学校」と言っても、歌・合唱だけを練習するのではない点である。常に、「合唱と図画工作」、「合唱と民族舞踊などのダンス」、「合唱とピアノなどの楽器の練習」、というように合唱と何かを組み合わせ、その組み合わせを半年毎に代え、繰り返し学ぶようになっている。このように、歌・合唱だけでなく、他の楽器の演奏も、ダンスなどの身体表現も、美術的表現もと、芸術全般を総合的に経験する事により、その体験の積み重ねが合唱における音楽表現にも生かされていた。

以上の様に、設備も整い、教育内容も充実した「音楽教室」であるが、行政から多くの援助がある「公立の音楽教室」なので、生徒が支払う月謝は日本円にしてわずか千数百円である。

以上、オーストリア・ドイツの音楽教育のシステムや内容をまとめると、学校教育の中での音楽の授業は、日本の学校音楽教育に比べても、ごく簡単なものであり、決して高度な内容を持ったものではない。しかし、希望者には、行政の援助で大半の経費を賄う公立の「ムジーク・シューレ」が用意されている。そこでは、立派な設備と多くの科目が用意され、専門家による確かな教育を安いレッスン料で受ける事ができる。

### 3 ハンガリーの音楽教育

#### (1) ハンガリーの「音楽小学校」

ハンガリーでは、共産主義体制の時代から、一部の才能を小さい時から育てる特別な教育制度がある。音楽・スポーツ・美術・情報（コンピューター）などを専門とした「特殊小学校」である。しかし、1990年以降、開放路線が進み、現在は廃校になった所も多く、数は減っている。音楽を専門とした「音楽小学校」は、普通校20校前後に1校の割合で設置されている。即ち、中規模以上の町に1～2校ある。

義務教育であるが、入学試験もあり、継続して音楽訓練を受ける為、途中からの編入は認められていない。入学試験は、幼児が対象であるので、簡単なものである。「受け答えがちゃんとできるか」「先生が歌うごく簡単な旋律を真似して歌えるか」「本人と親に『音楽小学校』に通わせる意志があるか」などである。つ



まり、特別の才能がある子供でなくても、子供の可能性を十分に発揮させようという事である。ハンガリーでは、基本的に教員の異動がなく、優秀な「音楽小学校」には、有能な先生が多く集められ、「子供の可能性を100%以上に発揮させる」ような優れた音楽教育がなされている。

入学競争率は「音楽小学校」全体で、1倍強から3倍くらいであり、優秀な「音楽小学校」は、倍率も高い。首都ブダペストの「マルツバーニ文化センター」に幼児のための「音楽教室」がある。3歳児以上の幼児が通うクラスでは、リトミックを専門とする大学の教授が教えている。そこでは、身体表現でリズム感や音感を養う事を目的にしているのであるが、多くの幼児は「音楽小学校」に入るための受験準備の為に通っている事を、この教授も認めていた。そのため、この教室に入る事自体が競争となっている。

「音楽小学校」の特徴は、ハンガリーを代表する作曲家であり、音楽教育者であったコダーイ・ゾルタン (Kodály Zoltán [1882~1967]) の音楽教育理論 (コダーイ・システム) に基づいて、「毎日、歌う事」である。1年生は週3回、2年生以上は毎日1時間の合唱を中心とした音楽授業と、週2回の合唱練習がある。ブダペストやニレジハーザでいくつかの「音楽小学校」の授業や合唱活動を視察したが、その中でも、内容的にも高度な優れた授業をしていた、ニレジハーザの「コダーイ音楽小学校」の授業をハンガリーの音楽教育のケース・スタディーとして選び、次にその授業や合唱活動について詳しく記す。

## (2) 「コダーイ音楽小学校」の音楽教育

ニレジハーザ「コダーイ音楽小学校」は公立の義務教育の小学校であり、ニレジハーザ市内唯一の「音楽小学校」である。各学年は50~60名で、それぞれ2クラスに分かれている。その内、男子の人数は学年によりかなり差があるが、1~3割位である。

まず、授業全体から、強く感じたのは、1年生(6歳)から8年生(14歳)まで全学年とも、子供達が意欲的に授業に取り組んでいる事である。授業は、基礎的なソルフェージュ力をしっかり身につけさせる事に重きをおき、無理なく、そして少しずつ積み重ねて、確実に音楽的感性や能力を育てていくよう工夫されている。その結果、授業内容が十分習得され、子供たちの意欲となって表れていると認められた。基礎力をしっかり身につけているので、読譜力があり、新曲を練習する時も(パート練習などなく)すぐに合唱が出来る。歌う事が出来るから楽しんで「音楽する」ことができるのである。

この「音楽小学校」で採用されていた教科書に載っている歌及び合唱曲の曲数は非常に多い。各国の小学校の音楽科教科書には、何曲くらいの歌や合唱曲が載っているのか、比較のために[表1]を作成した。

次頁の表により、ハンガリーの「音楽小学校」の教科書は、日本やオーストリアの教科書に比べ掲載曲数が非常に多く、日本の教科書に比べ約5~10倍もあり、

表 1 小学校音楽科教科書の歌・合唱曲の曲数

学 年	1	2	3	4	5	6	7	8
日 本 * 1	32	30	32.7	28	23	21.7	—	—
オーストリア * 2	32		109		—	—	—	—
ハンガリー * 3	131	306	245	207	147	108	120	61
(ページ数)	130	156	154	177	189	164	192	212
(ハンガリー／ 日本) 比	4.9	10.2	7.5	7.4	6.4	5.0	—	—

- \* 1 日本：音楽科教科書を出版している 3 社（教育芸術社・教育出版社・東京書籍）の平均値。歌詞のみの曲を含む。楽器練習用又は合奏用の曲であるが、歌詞が付いているものは含む。鑑賞目的の曲は、歌詞が付いているものでも含めない。上記以外に、「鑑賞教材」「合奏教材」もある。全学年に載っている「君が代」は含めない。
- \* 2 オーストリア：「Bergheim Volksschule」(P.61) で使われていた教科書（『MUSIK IN DER GRUNDSCHULE』MUSIKVERLAG HELBLING による。1・2 年で 1 冊，3・4 年で 1 冊になっている。
- \* 3 ハンガリー：ニレジハーザをはじめ多くの「音楽小学校」で使われている教科書（『ÉNEKESKÖNYV 1～8』NEMZETI TANKÖNYVKIADÓ）による。

学年が上がるにつれて曲数は減っていく事が分かる。曲数が減るのは、短い斉唱から長い合唱曲へと 1 曲の楽譜量が増えるからである。

次に教科書の内容をみる。「コダーイ・システム」に基づく教科書と言っても、採用されている曲はコダーイの曲ばかりではない。ハンガリーの大作曲家 B. バルトーク (Bartók Béla [1881～1945]) や J. S. バッハ (注10参照), W. A. モーツァルト (Wolfgang Amadeus Mozart [1756～1791]) 等の曲もたくさん入っている。この「コダーイ・システム」の教科書では、1 年生の歌の内、約76%がハンガリーの「わらべ歌」や「民謡」であり、低学年の児童にも歌いやすく工夫された、音域が狭く短い曲ばかりである。

1 年生の最初に習う音符は、長い音符（4 分音符であろうがその形をしていない）と短い音符（その半分の音符）として習い、後からそれを 4 分音符・8 分音符として習う。2 年生になってから、2 分音符、付点 2 分音符、全音符を習う。3 年生では 16 分音符も習う。日本では「音楽教室」などで、幼児期からピアノなどを習う子供が相当数いるが、その教室で教則本として一番多く使われてきた、「バイエル・ピアノ教則本」や「メトード・ローズ」では、4 分音符・2 分音符・全音符を習い、習熟してから 8 分音符を習う。「コダーイ・システム」とは長い音符と短い音符を習う順番が逆になっている。数の概念が未確立な幼児期から、四分音符の 1 拍から全音符の 4 拍までを数えながら弾く方法より、長めの音符（4 分音符）と短い音符（8 分音符）のみで、リズムを体で体得していくほうが、リズム感を確実に身に付けやすく優れた教育法である。

ハンガリーでは、ド・レ・ミで歌う事は、「移動ド唱法」のみのことであり、絶対音高で歌う時は「ドイツ音名」が使われる。「固定ド」の階名唱法という考え方は元々無いのである。このように、「階名」か「ドイツ音名」かのどちらかにははっきりと分けているので、日本のような、混乱はない。「ドイツ音名」は 2

年次から習い、リコーダー奏もそれに合わせて始める。

歌の曲に入っている音の数・種類・音域に関しては、1年生の最初は、1音（高）のみ（譜例 a）で言葉にリズムをつけて（b）歌う（あるいは唱える）事から始める。次にソ・ミの短3度だけ（c）で出来た曲を色々な高さの調（主としてハ・ヘ・ト長調）で歌う。簡単な音型を色々な高さで歌い習熟させるようになっている。これは「移動ド唱法」を採用しているから可能な事である。次にソ・ラの長2度のみ（d）の曲。順にミ・ソ・ラの完全4度（e）、ド・レ・ミの長3度の3音（f）、ド・レ・ミ・ソの完全5度の4音（g）、ソからドへの下行完全5度の跳躍（h）、そして、ラ・ソ・ドと下へ長6度（i）に広がり、同じ長6度をド・レ・ミ・ソ・ラの5音（j）で、ド・レ・ミに下へ音域を広げてラを足し（k）、さらに下へソを足す（l）、というように少しずつ音域が広がっている。音域1オクターブの曲（m）は1年生の最後になって少し出て来る。このように、少しずつ音域を広げることで、児童全員がそれぞれの声の音域を無理なく広げていけるようによく考えられている。

譜例 (a)        (b) 

(c)     (d)     (e) 

(f)     (g)     (h) 

(i)     (j)     (k) 

(l)     (m) 

また、上記の階名の中にはまだ「ファ」と「シ」が入っていない。「ミ・ファ」と「シ・ド」の半音を含まない五音音階（ペントニック pentatonic）の曲を主に学んでいる。

一般的に歌の練習では階名や歌詞で歌う事が中心になりがちであるが、「コーディ・システム」では「ハンド・サイン」<sup>(11)</sup>と「指五線」<sup>(12)</sup>を多用して学ぶようになっている。声は1つの音程しか出せないのであるが、「ハンド・サイン」を使う事により、一人一人が自らの体で2種類（両手を合わせ3種類も可）の音高を表現できるのである。これは自分一人で2部合唱をしているかのように、ハーモニーを意識しながら歌う事ができ、ハーモニー感を育てるのに非常に有効な方法である。

このハンド・サインを使って、1年生から「階名唱」が行われていた。1年生の授業では、2音だけ（ソ・ド）で出来ている曲を「ハンド・サイン」で示しながら歌っていた。そして、3音（ド・ミ・ソ）の曲は「指五線」で示しながら歌っていた。「指五線」で五線における音高を指し示し、音符の位置が理解できて



から、紙鍵盤の上に黒玉（符頭）だけの音符を並べる練習をしていた。音の上がり下がりなどを「指五線」で自ら確認し、また、児童が理解できている事を教師も目に見える形で確認してから、進めていく方法である。まだ楽譜の読めない小さい子供でも、確実に理解できた事を確認しながら進める良い方法である。

また、リズム聴音（リズムの聞き取り）は、まず先生が手拍子で4分音符と8分音符のみの短い「リズム譜」を叩く。それを子供たちが同様に叩く。子供たちは耳で聞いたリズムを頭で理解し、手拍子で表現する。教師は、子供たちが覚えられた事を確認してから、マッチ棒状の物（符尾と連桁）を並べ、リズムだけを表わすよう指導していた。

これら全ての練習で、（特に低学年では）ハンガリーの「わらべ歌」や「民謡」が多く使われ、すぐにステップや踊りもつけ、教卓の周りで踊りながら歌われていた。どの曲でも「ハンド・サイン」と「階名唱」、「指五線」と「ドイツ音名」、そして「歌詞」で歌い、「リコーダー」で演奏し、さらに「踊り」もつけて、一つの曲でも様々な方法で練習する。音程も、音高も、リズムも体全体で覚えられるような工夫がされていた。これらの色々な方法は、学年が上がっても繰り返して行われていた。

また、日本では音大の受験生でもないと言えない「音程」を、2年生より学んでいた。最初は、完全1・4・5・8度。3年生では長・短2・3度も習っていた。先生が2音を和音で弾き、児童はその音を下から歌い、各音程が書いてあるカードを探し、掲げる。他のパートとのハーモニーを感覚だけで歌うのではなく、理論的に完全音程や長・短音程を理解して歌う訓練がされていた。

これらの「音程練習」も、「ハンド・サイン」や「指五線」も立って始め、一つでも間違えたらその場で座る、最後まで出来た子にご褒美がもらえるという形で行われていた。

合唱は、1・2年生では斉唱のみで歌い、3年生からパートが分かれる。まず、5度ずれたカノンを練習し、そして2部合唱・3部合唱となっていく。

このような練習が積み重ねられた結果、6年生以上では次のような事を行っていた。先生がピアノで旋律（4～8小節くらい）を2～3回弾く間に覚え、階名で歌う。覚えるだけでも結構難しい旋律である。次に、子供達はその旋律を歌い、先生は下のパートを弾く。子供達は今覚えた旋律を歌いながら、聞こえてくる下のパートをその場で、「ハンド・サイン」で表す。覚えたばかりの旋律を歌い、同時に聞こえてくる音を表現するというのはかなり難しい事である。以上の事が出来ると、その逆、つまり下のパートを歌いながら、上の旋律を「ハンド・サイン」で表す。という事もすぐできるようになっていた。これは、声と「ハンド・サイン」を使い、楽譜を見なくても、2つの旋律を同時に体で表現できる事である。このように非常に複雑で難しい事がすぐ出来るのは、1年生の時から繰り返し練習されてきた成果である。効果的な指導を繰り返す事により、それを次々に受け入れて自分の力とする可能性を子供は多く持っている。改めて子供の受容力

の大きさに驚かされた。

また、「ハンド・サイン」による、ハーモニー練習もしていた。先生が示す両手別々のサインに合わせ2部に分かれて子供たちが歌う。決められた既製の楽譜のカデンツに縛られず、自由に様々な音程や和声進行を歌うことが出来る。複雑なハーモニーや和声進行にも、即座に反応できるハーモニー感を養うのに効果的な方法である。

以上の様に、わずか数小節の「わらべ歌」でも、様々な練習方法を取り、同じ練習は、多くても2～3回である。一つの曲でも、次々に練習方法を変えて歌う（表現する）事で、全く飽きる暇も与えない。1年生から8年生まで、どの授業も内容は豊富で、45分又は50分間を「飽きさせない」「気を散らす間も与えない」「集中力のいる」中身の濃い授業であった。そして、子供の可能性を信じ、それを引き出そうとしている先生方の熱意を強く感じた。

このコダーイ・システムは、合唱を中心とした授業であり、リコーダー以外の楽器の練習は入っていない。但し、大半の子供は、授業の終わった午後、「音楽小学校」の隣にある「音楽教室」で楽器の演奏も習っている。

このような練習を積み重ねた、5年生から8年生全員で「カンテムス」児童合唱団を組織している。指揮は、6年生から8年生の音楽担任でもある、天才指揮者サボー・デーネッシュ氏である。「カンテムス」は氏の指揮の下、対外的な演奏活動もし、（注5）に記したようにその実力は世界的に認められている。他にも多くの「少年少女合唱団」の練習や演奏会を聞いたが、その基礎的な力の高さは、世界最高水準である。

「コダーイ音楽小学校」を卒業した子供たちは、ブダペスト市内の高校へ通うなどニレジハーザを離れる子供もいる。その結果、「カンテムス」からOG合唱団「プロムジカ」へ残る子供は、それほど多くはない。25年の伝統があるが、「カンテムス」のメンバーから「プロムジカ」に残って活動しているのは約80名である。つまり、これだけの素晴らしい教育を受け、基礎力を持っていたとしても、そのまま音楽専門の道へ進むのはほんの一部である。専門家ではなく、趣味として、教養として優れた合唱が歌える力を持っている子供や卒業生が大勢いるのである。世界最高の合唱団・合唱団員を育てながら、それはプロを養成しているのではなく一般の市民である。この音楽的な教養水準の高さは日本とは大きな差がある。

九 以上、ハンガリーの音楽教育の特徴をまとめると次のようになる。小学校1年生から音楽を専門として学ぶ「音楽小学校」が、公立の義務教育の中に用意されている。そこでは、「コダーイ・システム」による優れた教科書とそれを生かす音楽教育法が確立され、実践されている。その内容は、合唱教育を中心として、基礎力の養成を重視し、少しずつ確実に子供の能力を伸ばしていく、高度な音楽教育である。そして、優れた教科書を十分に生かすことができる有能な指導者が集まり、「子供の可能性を100%以上に発揮させる」ような教育がされ、感性豊かな子供たちが育てられている。

## 結び

日本の学校音楽教育では、「階名唱」を取り入れ、リコーダー奏や鍵盤楽器など種々の楽器演奏も行い、それらの歌唱・演奏に必要な音楽理論も全て含まれている。これは、国際的にみてもかなり高度な音楽教育であり、それを全ての児童に課している。そして、それ以上の事を望む者は、高い月謝を払って個人で音楽教室に通っている。その大半はピアノのレッスンを受けている。

オーストリアやドイツの学校教育（義務教育基礎過程・注8参照）の中での音楽の授業はごく簡単なものである。しかし、本当に音楽を学びたい者は「ムジーク・シュレー」で高度な指導が受けられる。費用は、日本の数分の一から十分の一位の安さである。そこでは、歌唱や合唱はもちろんの事、オーケストラの全ての楽器の演奏やアンサンブル等どんな音楽も学ぶ事が出来る。

ハンガリーでは、希望者には、小学校1年生から十分に才能を伸ばせられるよう「音楽小学校」がある。そこでは、有能な先生たちにより、「コダーイ・システム」という優れた教育法の下で専門的で高度な音楽教育がなされ、感性豊かな子供たちが育てられている。その結果、「カンテムス」のような世界最高の児童合唱団も生れている。

以上、義務教育の中の音楽教育のシステムについては、日本では、全児童が同じ教育を受けるシステムであり、その内容は国際的にみてもかなり高度である。オーストリア・ドイツでは、全児童が同じ教育を受けるという点では日本と同様であるが、その内容はかなり簡単なものである。但し、5年生からは「音楽ギムナジウム」で学ぶという選択肢もある。ハンガリーでは、義務教育の中に「音楽小学校」というシステムがあり、希望者は、「コダーイ・システム」の下で非常に高度で優れた音楽教育を、小学校1年生から学ぶ事が出来る。授業時数は、おおむね、日本は週2時間、オーストリア・ドイツは週1時間、ハンガリーの「音楽小学校」では、毎日1時間と週2回の合唱練習が組まれている。具体的な内容に関して、「階名唱」は、オーストリア・ドイツでは普通は行わない。日本では、「移動ド唱法」が指定されているが、ほとんどの小学校では「固定ド唱法」として「階名唱」が行われている。ハンガリーの「音楽小学校」では、「階名唱」と固定ドとしての「ドイツ音名」が有効に使い分けられ効果をあげている。楽器演奏に関しては、オーストリア・ドイツでは、ほとんど行われない。ハンガリーの「音楽小学校」では、リコーダー奏のみを行う。日本では、リコーダー・鍵盤楽器他種々の楽器が取り入れられている。音楽理論は、各国の教育内容に応じて、オーストリア・ドイツでは作曲家の紹介などが多少あり、日本では演奏内容の必要に応じて多少深く組み入れられており、ハンガリーの「音楽小学校」では日本の音楽大学と同様の内容まで勉強されている。

義務教育以外に、希望者だけが学ぶ課外での音楽教育については、日本では、

「音楽教室」にもその指導者にも、特に公的な資格や認可はなく、月謝は決して安くはない。学ばれている科目は、大半が鍵盤楽器（主としてピアノ）の教育である。オーストリア・ドイツの音楽教育においては、この課外での教育が最も重要である。公設の「ムジーク・シュレー」が全国にあり、国で認められた指導者が指導にあたっているが、月謝は、日本の数分の一から十分の一位である。そのレッスン科目は、歌や合唱の他、オーケストラのほとんど全ての楽器や民族楽器など、ありとあらゆる楽器演奏の個人レッスンとアンサンブルが用意され充実している。ハンガリーにも公設の「音楽教室」があり、楽器演奏を中心に指導されている。しかし、音楽教育の中心は、「音楽小学校」における「コダーイ・システム」による合唱教育である。

日本の音楽教育の問題点は、ピアノを中心とした鍵盤楽器のレッスンに偏った音楽教育である事、教育システムや指導法が（特に低学年で）年齢を十分考慮されていない事、義務教育の中の音楽カリキュラムが高度すぎる事、その内容を十分に指導できる指導者の配置がされていない事、その為児童・生徒はその内容をあまり身につけていない事、その結果、音楽的な教養の水準はヨーロッパの国々よりかなり劣る事などである。日本の音楽教育のシステムや指導のあり方等考え直さなければならない事が多いことを痛感した。

ある程度以上高い教育を全ての子供に課しても、全体としては効果が上がらない場合が多いのである。個性が重視されている時代において、日本においても個性に合った音楽教育が、特別な費用負担をしなくても受けられ、才能を伸ばしうる音楽的な環境を整備する必要があるのではなかろうか。その結果、全体として日本の音楽的な教養の向上が計られることを期待したい。

#### 注

- (1) ニレジハーザ (Nyíregyháza)：ハンガリーの首都ブダペストから東へ400km位のところにある市。ハンガリーの中でも東方に位置する。
- (2) コダーイ音楽小学校 (Zoltán Kodály Elementary School)：ハンガリーを代表する作曲家コダーイ・ゾルタンの名を冠した、ニレジハーザ市唯一の「音楽小学校」。
- (3) カンテムス (Cantemus)：「コダーイ音楽小学校」の5年生(10歳)から8年生(14歳)全員で組織された小学校直属の児童合唱団。Cantemus はハンガリー語で「歌え」の意。
- (4) プロムジカ (Pro Musica)：カンテムス合唱団の卒業生で組織されている少女合唱団。団員は14歳～22・3歳。「コダーイ音楽小学校」が全面的にバックアップしている。
- (5) 世界で最高の児童合唱団：どれだけすばらしい合唱団であるかは聞けばはっきりすることであり、それを文章で表現するのは不可能に近い事と思われるが、参考に過去のコンクール実績を紹介する。「カンテムス」・「プロムジカ」・「バンキエリ (Banchieri「カンテムス」のOBで組織された男声重唱団)」各合唱団が世界の著名な国

際合唱コンクールで金賞（第1位）を受賞した数は20以上（1982以来）もあり、その中でも、グランプリ（各部門を通しての最高賞）を得たものは以下の通りである。

- Béla Bartók International Choir Competition (Debrecen/1986) 1st Prize, Grand Prix. ベラ・バルトーク国際合唱コンクール（デブレツェン 1986年）Pro Musica
- Yugoslavia International Choir Contest (Yugoslavia/1987) 1st Prize, Grand Prix. ユーゴスラビア国際合唱コンクール（ユーゴスラビア 1987年）Cantemus
- Arezzo International Choir Contest (Italy/1995) 1st Prize, Grand Prix. アレッツォ国際合唱コンクール（イタリア 1995年）Pro Musica
- Béla Bartók International Choir Competition (Debrecen/1996) 1st Prize, Grand Prix. ベラ・バルトーク国際合唱コンクール（デブレツェン 1996年）Banchieri
- Athens International Choir Competition (Athens/1996) 1st Prize, Large Gold Medal. アテネ国際合唱コンクール（アテネ／1996年）Pro Musica

（6）移動ド唱法：調号が何も付いていない「ハ長調」の階名をド・レ・ミ〜シ・ドと読む。絶対音高を表す方法として「音名」ハ・ニ・ホ・ヘ・ト・イ・ロ・ハがある。「移動ド唱法」では、調号に♭が一つ付いた「ヘ長調」では、F音が主音となり、F音からド・レ・ミ〜と読み替える。同様に調号に♯が一つ付いた「ト長調」ではG音が主音となり、G音からド・レ・ミ〜と個々の音の階名を読み替える。このように主音（ド）の位置が、おのおの調により移動する読み方を「移動ド唱法」と言う。それに対し、「固定ド唱法」では全ての調でハ長調の階名と同じ読み方をし、♯や♭が付いてもF音はファ、G音はソと読む（譜例参照）

ドイツ音名	C	D	E	F	G	A	H	C
音名	ハ	ニ	ホ	ヘ	ト	イ	ロ	ハ



階名（ハ長調）	ド	レ	ミ	ファ	ソ	ラ	シ	ド				
移動ド唱法の（ヘ長調）の階名				ド	レ	ミ	ファ	ソ	ラ	シ	ド	
移動ド唱法の（ト長調）の階名					ド	レ	ミ	ファ	ソ	ラ	シ	ド

楽器を演奏するのには、「固定ド」で理解する方が便利であるが、歌には「移動ド」の方が音程が分かりやすい、という利点がある。日本では、「固定ド唱法」でも「移動ド唱法」でも、読み方はド・レ・ミと同じなので、どちらのド・レ・ミなのか常に混乱する。文部省の「学習指導要領」では、階名唱は「移動ド唱法」で読むよう指示している。しかし、「移動ド唱法」は前述のように何種類もの読み方を覚える必要があり、同じ階名を色々な高さで歌うための難しさがある。そのため、「移動ド唱法」は学校教育の現場ではあまり実践されていないのが現状である。

八八

- （7）高額な月謝：個人経営の音楽教室が大半である為、正確なデータはないが、大体以下のようなものである。グループレッスンで月謝4,000～8,000円位。個人レッスンは初心者で5,000～10,000円位。中上級者で7,000円～15,000円位。専門家を目指す受験生では1回のレッスンで10,000円以上も珍しくはない。
- （8）フォルクスシューレ（Volksschule）：満6歳（日本より年齢制限は緩やかである）より就学する国民学校（義務教育基礎過程）。4年間在籍し、満10歳で、Re-



- alschule（実業中等学校）・Gymnasium（一般教育中高等学校）・Hauptschule（義務教育本課程学校）から一つを選択する。ドイツの Grundschule（義務教育基礎課程）に当たる。
- (9) ヴォルフラーツハウゼン (Wolfratshausen)：ミュンヘンから西へローカル線（Sバーン）で40分くらい行った所にある比較的高級住宅の多い町。
- (10) ハッレ (Halle)：ドイツ北部，ライプツィヒの西，電車で30分位のところにある。ライプツィヒの聖トーマス教会では，1685年に生れ，「音楽の父」とも言われる J. S. バッハ (Johann Sebastian Bach [1685～1750]) が，永く合唱長及びオルガニストを務めた。そして，ハッレでは，同年に，「音楽の母」とも言われる G. F. ヘンデル (Georg Friedrich Händel [1685～1759]) が生れている。
- (11) ハンド・サイン：手の形や向きで階名を表す方法である。横向きに置いた握りこぶしがド，指を伸ばし水平に置くとミ，手の甲を見せた形がソ，などと表す。声を使わずに音高を体で表現する事が出来る。
- (12) 指五線：正式な名前がないようなので，私が仮に付けた名前である。指を広げて5本の指を五線譜のように横に並べ，音符の高さを反対の手で指しながら音高を表す。音高の上がり下がり，音の幅（音程）が体で理解できて効果的な方法である。隣同士の指は3度の幅になる。例えば，小指（五線譜の第1線）と薬指（同第2線）に当たり3度。指の間と隣の指の間も3度となる。例えば，小指と薬指の間（五線譜の第1間）と薬指と中指の間（同第2間）も3度のよう。

#### 参考文献

- Ádám, Jenő 『ÉNEKES KÖNYV 1～4』 NEMZETI TANKÖNYVKIADÓ 1999
- 『CANTEMUS, ProMusica』 KODÁLY ZOLTÁN ÁLTALÁNOS ISKOLA NYÍREGYHÁZA
- Csabai, Judit 『NYÍREGYHÁZA IS WAITING FOR YOU』
- Helga, Szabó 『ÉNEKESKÖNYV 1～8』 NEMZETI TANKÖNYVKIADÓ 1999
- Ortmayr, Caffou 『Singt und musiziert mit uns』 JUGEND UND VOLK VERLAGSGES 1987
- Rindere, Leo 『MUSIK IN DER GRUNDSCHULE Band 1／2』 MUSIKVERLAG HELBLING 1976
- Rindere, Leo 『MUSIK IN DER GRUNDSCHULE Band 3／4』 MUSIKVERLAG HELBLING 1977
- Schmidt-Gaden, Gerhard 『TÖLZER KNABENCHOR』 2000
- Wolfgang, Furlinger 『RUNDHERUM, DAS IST NICHT SCHWER』 VERITAS-VERLAG 1986
- 浅香 淳 他『新訂 標準音楽辞典』音楽之友社 1991
- 市川 都志春『小学生の音楽 1～6』教育芸術社 1996
- 『オーストリア』オーストリア連邦報道庁
- 小原 光一 他『新訂 音楽科教育法』音楽教育研究協会 1992
- フォーライ・カタリン 『ZENE MINDENKIE 1～4』コダーイの音楽教育製作委員会 1989-90

三善 晃 他『新版 音楽 1 ～ 6 』教育出版株式会社 1996

湯山 昭 他『新しい音楽 1 ～ 6 』東京書籍 1996

### 視察先

「ザルツブルク・ベルクハイム小学校 (Salzbrug Bergheim Volksschule)」の音楽授業

「ヴォルフラーツハウゼンのムジーク・シューレ (Städtischen Musikschule Wolfratshausen)」の合唱クラスのレッスン

「ハッレのズィングシューレ (Singschule des Konservatoriums “G. F. Händel”)」の施設見学と合唱団の演奏会

「ミュンヘン教育大学」付属幼稚園の音楽活動 (リズム・体操)

「ミュンヘン教育大学」の授業 (「オルフ音楽教育法」に基づく「早期音楽教育と基礎教育」)

「HORT (学童保育)」(ミュンヘン) の音楽活動の発表

ミュンヘン市内の 3 つの幼稚園における「オルフ音楽教育法」に基づく活動発表

「テルツ少年合唱団 (Tölzer Knabenchor)」(ミュンヘン) の練習 (教会に属さない世界最高の少年合唱団)

「ザルツブルク音楽ギムナジウム (Musischen Gymnasium Salzbrug)」の演奏会

「ヴェルシュマルティ・ミハイ音楽小学校」(ブダペスト) の 1 ～ 4 年生の授業, 2 ～ 4 年生の合唱活動

「ヴェルシュマルティ・ミハイ音楽高等学校」の合唱授業 (生前のコダーイの指導を受けた, ミクローシュ・チーク先生が指導)

「フェレンツェ・エルケル小学校」(ブダペスト) の「マニフィカート少年少女合唱団」演奏会 (2000年バルトーク国際合唱コンクールで全部門のグランプリを獲得)

「コダーイ音楽小学校 (Zoltán Kodály Elementary School Nyíregyháza)」(ニレジハーザ) の授業 (1 ～ 8 年生全学年)

「コダーイ音楽小学校」の「カンテムス」児童合唱団と「プロムジカ」少女合唱団の練習と演奏会多数

「ブダペスト教育大学付属幼稚園」の音楽活動

「マルツバーニ文化センター」(ブダペスト) 幼児の為の音楽教室 (3 歳から 6 歳までの 3 コース) のレッスン

「コダーイ合唱学校」(ブダペスト・私立) の「ユビラーテ合唱団」の練習 (2000年リッツで開催された合唱オリンピックにて参加300団体中のグランプリを獲得)

(本学専任講師・初等教育)